

妙法寺蔵妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅について

宮 次 男

(一)

昭和六十年十月六日—十一月十日に堺市博物館において開催された特別展「堺の仏像仏画」は、美術史を専攻する者にとって、まことに有意義な展観であり、また、この地方の文化財の層の厚さを改めて認識させた催しであった。本稿で紹介する金字宝塔曼陀羅もその際展示された作品の一つである。

金字宝塔曼陀羅は、経文を紺紙に金泥で塔形に書写した文字塔の周囲に経意を描いた仏画で、岩手中尊寺に金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅十幀が蔵され、妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅が奈良談山神社に十幅、京都立本寺に八幅蔵されている。私は、わが国にのみ遺品が伝存するこのユニークな仏画について早くから関心があり、これら三本について調査した結果をまとめて『金字宝塔曼陀羅』（吉川弘文館、昭和五十一年三月）に発表した。その時点では、堺の妙法寺本の存在については全く知らなかったのである。したがって、堺市博物館の上記特別展は、私にとってまことに有難い展観であった。そして、この金字宝塔曼陀羅について一文を草したいと思いをのらせたのである。このたび私の意中を察して、この紹介を本誌にすることを快く許可して下さい

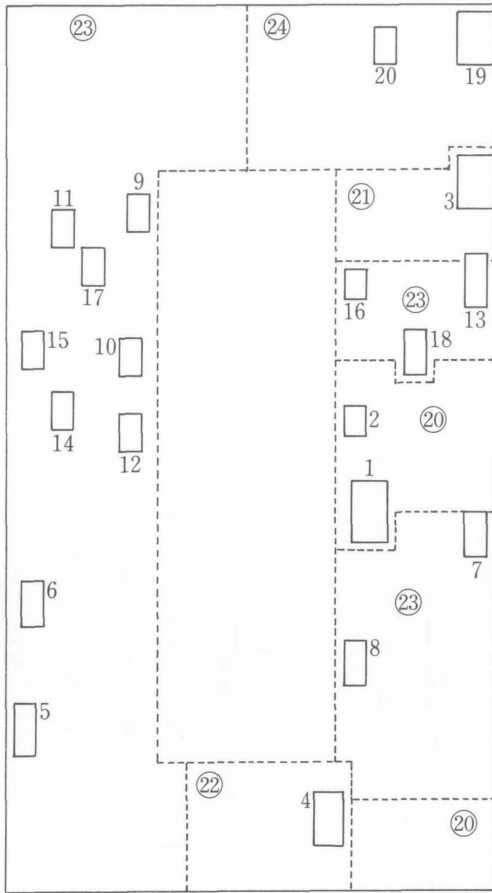
った妙法寺および堺市博物館当局、さらに、いろいろ御助言や御協力をしていただいた同館主任研究員の吉原忠雄氏の御好意には感謝に堪えない。深く御礼申しあげる次第である。

(二)

妙本寺本の「宝塔曼荼羅図」（特別展における名稱）は、聖徳太子筆と伝えられている。^(注1)妙法蓮華經八巻のうち、第七巻、すなわち、常不輕菩薩品第二十、如来神力品第二十一、囑累品第二十二、藥王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四の五品を内容とする一幅である。縦一〇三・七糎、横五四・五糎の紺紙に、経文は金泥、但し基段正面と階段の一部は銀泥、絵は金銀泥でかかれていた。画面の周縁は唐草文帯で区画（但し下縁は欠如）されている。このような形態は談山神社本および立本寺本においても同じである。

文字塔は九層で、初層には裳階があるので外観は十層のようにみえる。これは談山神社本と同形で、立本寺本には裳階はない。

初層正面は扉が外側に開かれ、内部に二仏が並坐する。そして、基壇の周囲には高欄が設けられ、正面の階段にそれは続いている。談山神社本は安置



b 同 見取図

法華經卷七所説の五品の絵の配置は挿図1に示すように、右半分には輕品20と藥王品23が二か所に、また神力品21、囑累品22、妙音品24が各一か所に描かれ、左半分はすべて藥王品23が占めている。この藥王品重視の配分は立本寺本においても同じで、談山神社本でも藥王品は重視されるが、ここでは神力品がかなりスペースをさいて描かれている。

各品の題辭と図相についてのべると、題辭は二本の銀泥の線でかまれた区画に金泥で書かれていて、その經句は、全て立本寺本のそれと同一の選択によって記入されており、しかも、立本寺本で省略してある經句がこ

挿図1 法華經金字宝塔曼陀羅 卷七 大阪 妙法寺藏

仏が一尊で、基壇に高欄はない。しかし、立本寺本は妙法寺本と同形式で構成されている。したがって、初層の裳階を除くと、妙法寺本は立本寺本に極めて近い形態で文字塔が描かれているといえる。また、經文の書き出しも、最上の相輪部の頂きから始まり、次第に下降するもので、これは他本も同じである。

以上、文字塔の形態からみれば、妙法寺本は立本寺本により近似していることが指適できるが、次に文字塔の周辺に描かれた図相およびそれに傍書された題辭はどうか、その内容について検討する。

(三)

ここでは書かれていることが注目される。立本寺本と校合しながら示すとそれは一そう明らかになる(立本寺本の省略箇所は「」で示す)。この記述にあたり、題辞番号は経文の順に従ってつけ、また末尾に「大正新修大藏経」法華部の頁を入れておいた。一方、図相においても立本寺本と基本的に類似するものであるが、配置に若干の相違がある。しかし、説活展開の経過からみて、妙法寺本の方がより自然であることが指適できる。

常不軽菩薩品第二十 ここでは、如何なる人に向っても常に礼拝して止むことがなくまた迫害されても、礼拝をつづけた常不軽菩薩の本事物語が主題となっている。

挿図2 法華経金字宝塔曼陀羅 不軽品 部分 大阪 妙法寺蔵

1(爾時)有一菩薩比丘名常不輕得大勢
〔以何因緣名常不輕〕比丘凡有所見若

比丘比丘尼優婆塞優婆夷皆悉礼

拜讚歎而作是言我深敬汝等不

敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道

當得作佛而是比丘不專讀誦經典但行礼拜(五〇下)

2衆人或以杖(木)瓦石而打

擲之避走遠住猶高

聲昌言〔我不敢輕於

汝等〕(汝等)皆當作佛(五〇下)

図は画面右側の中程に堀をかまえた邸宅から追われる僧形の常不軽菩薩(挿図2)と、右側最下端に土下座して合掌礼拝する菩薩を杖でむち打つ男たち三人が示される。ただし、題辞は下端場面にはない。

立本寺本の図相は邸宅を追われる菩薩と崖の上から乱暴をはたらく人々を礼拝する菩薩の二場が右下端に描かれている。このうち、邸宅のたたずまいは妙法寺本と類似するものである。(挿図3)これに対し、談山神社本は、これら二図相のほか、すでに成道者となって頭から光を放つ比丘菩薩が諸人から礼拝されている場面が示されている。

挿図3 法華経金字宝塔曼陀羅 不軽品 部分 京都 立本寺蔵

如来神力品第二十一(図版Ⅲ)ここでは地中より涌出した無数の菩薩たちが仏に対し、仏滅後において世尊と分身のいます国

挿図4 法華經金字宝塔曼陀羅 神力品 部分
京都 立本寺藏

図は画面右側、文字塔八、九層の横に、八尊の如来坐像が眉間の白毫から二条の光明を放ち、上方雲上の梵天にとどかせている有様が描かれている。この形態は如来の舌相を象徴的に表現したものとうけとめられる。そしてこの図相は、如来の数を含めて、立本寺本の画面右側上部の図相に類似する。しかし、立本寺本は二条の光明の代りに文字通り、如来の広長舌が示されている(挿図4)。また、立本寺本の題辞は、二分して書かれている。なお、談山神社本は、この如来の広長舌は図示されておらず、ただ雲上の天宮が示されているだけであるが、ここでは、林立する多宝塔と、仏誕生、仏成道、仏説法、仏涅槃、僧の経護持の有様が描かれている。これは、仏滅後において、仏所であったあらゆる場所で塔を建てて供養し、弘経すべしと説かれる経意を示すものである。

嘱累品第二十二(図版V)ここでは、釈迦が菩薩たちに得難き正覚の法を付属することを示す。

4 従法座起現大神力以右手摩無

量菩薩摩訶薩頂(而作是言我

於無量百千万億阿僧祇劫修習是

難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付属)(五二下)

図は文字塔の下方に示される。台座から立ちあがって地面におり立った釈迦が、その前に膝まづく菩薩の頭頂を右手でなでようとするとする光景で、他に四菩薩がひかえている。釈迦の台座からは光が放たれ、その傍に題辞が書いてある。

立本寺本では、文字塔初層の右手に図示されており、菩薩の数は四尊である。談山神社本は、これに関する題辞はないが、画面右上方に鷲峯山下の説

挿図5 法華經金字宝塔曼陀羅 藥王品 部分
大阪 妙法寺藏

土の滅度の処で広く法華經を説くことを誓うと、仏は一大神力を示すことが述べられる。

3 舌相至梵天 身放無數光

爲求佛道者 現此希有事(五二中・偈)

妙法寺藏妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅について

法会の釈迦が、台座に坐したまま右手で菩薩の頭をなでる光景が示され、さらにその上方に多宝塔が帰還するのを見送る諸仏が示されている。

挿図7 法華經金字宝塔曼陀羅 藥王品 部分
京都 立本寺藏

また僧俗がこれらを礼拝している。坐してその姿を人々に示す場面。菩薩の右前に悲しげな表情の阿修羅が坐し、

このうち、5と6は日月浄明德仏の滅度を一切衆生意見菩薩が悲むで茶毘にふした物語であり、7と8は菩薩が自から臂を焼いて行つた舍利供養の有様をのべたものである。なお立本寺本にある「而作是言」はこの場合、是言が書いてないので、無意味である。

図は画面左側の下端から上方へ、日月浄明德仏の涅槃、茶毘、舍利瓶を作る菩薩(挿図5)右側に移って、文字塔第二層の右に三基の宝塔前で臂を燃焼供養する菩薩、その下、山容を隔て臂から先を焼失した菩薩が

挿図6 法華經金字宝塔曼陀羅 藥王品 部分
京都 立本寺藏

藥王菩薩本事第二十三(図版IV-VI)ここでは藥王菩薩の
本事である一切衆生意見菩薩の物語と、法華經受持の功德
を图示する。菩薩の本事としては、
5 見佛滅度悲感懊惱戀慕
於佛(即以海此岸)梅檀爲
積供養佛身而以燒之(五三下)
6 火滅已後收取舍利作
八万四千寶瓶以起八
万四千塔高三世界(五三下)
7 即於八万四千塔
前燃百福莊嚴臂(五三下)
8 爾時諸菩薩天人
阿修羅等見其
無臂憂惱悲哀(而作是言)(五四上)
立本寺本

次に法華經を受持する者が得る諸利益についてはいろいろと譬喩でもって示される。

- 9 如寒者得火 10 如裸者得衣 11 如商人得主 12 如子得母 13 如渡得船
- 14 如病得醫 15 如暗得燈 16 如貧得寶 17 如民得王 18 如賈客得海（五四中）

これらの図はきわめて説明的な図様で、文字塔の左側、一切衆生意見菩薩の本事物語につづいて上方に描きだされ、一部、右側、如来広長舌図の下に示されている。

立本寺本の本事物語の図相は、如来の涅槃から、荼毘、そして舍利瓶製作にいたる三場面が文字塔左側に示されるが、各場面の個々の図様は妙法寺本

妙法寺蔵妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅について

挿図8 法華經金字宝塔曼陀羅 妙音品 薬王品 京都 立本寺蔵

に類似するものの、涅槃の上方に舍利瓶製作（挿図6）、その上に荼毘場面が描かれていて、これは物語の展開の順序にそなわい。その点、妙法寺本の方が自然である。しかし、菩薩の焼臂供養は、文字塔右側の中程に示され（挿図7）、二図とも妙法寺本と極めて近い図様で描かれている。次に、法華經受持の諸利益はいずれも文字塔の左側に示されていて、その図様は人々の姿態などいずれも極めて近い（挿図8）。一方、談山神社本では、本事物語は菩薩の幼少時の生活、焼失した臂が再びもどってこれを衆人に示す場面など、妙法寺本より多くの場面が示されている。さらに諸利益の譬喩の図様も妙法寺本や立本寺本と異なるものが多い。

妙音菩薩品第二十四（図版Ⅲ）ここでは妙音菩薩が浄光莊嚴国から娑婆世界の耆闍崛山（鷲峯山）に往詣して、釈迦および多宝仏塔を礼拝し、諸の衆生のために法華經を説いたことを述べる。題辞は画面右側上端に書かれているため、かなり剝落しているが、およそ、次の経句が書かれていたと考えられる。

19 爾時釋迦牟尼佛放大人相肉髻
光明（及放眉間白毫相光遍照
東方百八万億那由佗恒河沙
等諸佛世界過數已）（五五上）

20 千時妙音菩薩於

彼國没（與八万四千
菩薩俱共發來）（五五下）

この題辞は、釈迦の眉間の白毫から放たれた光明が東方の諸仏国土を照ら

したこと、および、妙音菩薩が多くの菩薩と共に彼の仏国土である淨光莊嚴国を出発したことを述べるものである。したがって、この図相は釈迦の眉間から放たれた光明が下方の洲浜にいます多くの如来を照らし、また、上方から樂天をしたがえて飛来する妙音菩薩を照らし出すところが描かれている。

如来たちがいる洲浜の周囲には多くの蓮華が生えているが、これは仏国土の景観ともみられる。しかし、経では、妙音菩薩が来詣の願意を釈迦の眼前に示そうとして、本国にありながら耆闍崛山に衆宝の蓮華を化作したと述べており、一般の経絵でも、釈迦の眼前に蓮華が描いてあるのが通例である。したがって、本図におけるかかる表現はむしろ例外といわなければならない。また、妙音菩薩の飛来の光景が、あたかも来迎図のように樂天をしたがえた図相になっているのは、妙音菩薩の飛来に際し、諸国は六種に震動し、七宝蓮華を雨ふらし、「百千の天の樂は鼓たざるに自ら鳴る」と経で述べるところを描き出したものと考えられる。洲浜の蓮華といい、また樂天といい、これらの図相は、経説をはなれて、絵画的効果をねらった表現とみることができよう。

立本寺本では、この場面は文字塔左側上方に、右上方の如来広長舌の場面に對比して描かれている(挿図8)。基本的には妙法寺本と同じ構図であるが、洲浜にいます如来の数は三尊と少く、釈迦もその対岸の洲浜で説法する形で表現されている。そして、問題の蓮華は、釈迦のいる洲浜の前に描かれている。このほうが経意に近い表現である。また、立本寺本も飛来する妙音菩薩は樂天をしたがえており、その点は妙法寺本と共通する図相である。談山神社本においては、蓮華化作は一尊だけ描いた釈迦の眼前に蓮華三莖が描いてあり、また、妙音菩薩の飛来は藥王品の日月淨明德仏の涅槃場面に向う姿で表現されていて、全く趣きを異にするものである。

(四)

以上、妙法寺妙藏法蓮華經金字宝塔曼陀羅の題辭と図相を立本寺本および談山神社本と比較しながら考察した。その結果、題辭においては、立本寺本と同じ個所が選択されており、さらに立本寺本が抄本的性格があるに対して妙法寺本は完本で、しかも立本寺本に先行する祖本的性格をもっているものように考えられた。図相においても同じで、各図の配置は両本が必ずしも一致していないが、個々の図相においては、形態的に相似する場面が多く、ここにおいても、両本が深い関係にあることが推察されたのである。

これに対し、談山神社本との関係はどうかというと、すでに述べたように、題辭や図相の選択規準が異なっており、両者は直接的な関係を持っていないとみなさなければならない。

そこで次に問題になるのは妙法寺本がわが国金字宝塔曼陀羅における位置とそれがいつ製作されたかという問題である。これを解決するには絵画としての様式、技法などの面から検討することが必要である。談山神社本、立本寺本と比較しながら、この問題を考えてみよう。

先ず文字塔と周囲の経意絵との位置関係である。談山神社本と立本寺本(巻一、巻二を除く)は、文字塔の左右が海に見立てられ、経意絵の端が岸辺の状態をなして、海波が描かれている。したがって、U字形の陸地の底辺部に塔が建ち、塔の背後は海(又は空地)になっていて、左右の場面は塔と地続きの同一地面であることがわかるように表現されている。これに対し、妙法寺本はそうした配慮はなく、その点では中尊寺藏金光明最勝王經金字宝塔曼陀羅と同じ構成を呈している。このように非合理的表現はきわめて日本的といえ

よう。このことは各場面の配置についてもいえることである。

談山神社本の図相の配置は、原則的に品次が進むにつれて、画面の左下部から文字塔の左側を上に向かって昇り、上端で右側に移って下降するように配置されている。この時計廻りの進行方式は、敦煌石窟壁画の法華経変相にもみられるところで、中国で定着した仏教説活図の配置法と考えることができる。それに反して、妙法寺本の配置は、挿図1に示したように、一定の法則はなく、かなり錯綜するといえよう。そして、立本寺本においても、これと同様の錯綜がみられる。その点では、妙法寺本は立本寺本と同類の配置構成をもつといふべきである。

妙法寺本の各図相はすでに述べたように、立本寺本と基本的に一致し、なかには相似に近いものもあるが、文字塔の形態では、妙法寺本には初層に裳階があること、また基壇正面の階段が金泥と銀泥でそれぞれ二段毎に書き分けられ、階段の形態を描き出すなど、相違が指摘できる。

次に、各図相の背景も両本ではかなりの相違が認められる。妙法寺本では、各図相は殆んどが平地に描かれており、起伏ある土坡、丘陵や岩山はごく一部にしか描かれていない。これに対し、立本寺本は岩山の起伏と海辺につづく丘陵の間に描きこまれている。これは談山神社本においても同じである。

妙法寺本にみるこの特色は、平坦部の多い中尊寺本に気分的に近いものである。さらに平安末期の中尊寺経見返絵にもこうした平坦部はしばしばみられるところで、この平坦な土坡はわが国における経絵の伝統的表現法によるものと考えてよいであろう。

次に、仏、菩薩、人物、建物など、個々の対象についての妙法寺本の描法をのべよう。

仏、菩薩、人物の肉身部は、金泥または銀泥で塗りつぶし、目鼻だちを墨

線で描きおこして、口に朱点を入れる手法で描かれている。しかし、肉身を銀泥で塗ったものは、銀の変色のためにその表情は殆んど明らかでない。この肉身部を金、銀で塗る手法は通常の紺紙経見返絵ではあまり行われていない。しかし、談山神社本、立本寺本ではこの手法で描かれていて、いわば宝塔曼陀羅様式といえるものである。その面貌にみる表情は概して可憐でおだやかであり、人物の中には感情が巧に表現されたものがある。こうした可憐な表現は中尊寺本に近いが、鎌倉初期の法華経絵巻にも窺われるところで、藤末鎌初の経絵様式の一端を示すものであるが、紺紙経見返しにはあまり用いられていないようである。

次に着衣の衣文線にあわせて引かれている衣皺の線は幾分繁雑で、しかも形式的に施されている。また、岩皺や土坡の端に引かれる皴線も形式的で簡略化されている。

樹木や草花は藤末鎌初の経絵に共通する形態を示し、特記すべき点はないが、軽快な運筆はみるべきである。

妙法寺本で特にすぐれた描写がみられるのは、画面右上方に描かれた妙音品所説の釈迦説法会、諸如来、妙音菩薩の飛来と神力品所説の如来の広長舌の場面で、そこには繊細で軽妙な筆致と洗練された貴族趣味が窺われる造形感覚が示されている。また、不軽品の邸宅も薬王品の三基の多宝塔などの建造物も適格に描かれ、注目に価する。

この建造物の描写は実にすばらしいもので、不軽品の邸宅につづく塀には金泥がうすく塗られており、薬王品の三基の多宝塔の初層外壁には白塗りを思わせるように銀泥がぬられているが、いずれも優美な趣きが自ずと表出さされている。また、文字塔の各層につけられた蓮子窓や腰板のまわりは朱で描かれ、それが金、銀泥で描いた腰板や長押上の壁面に色どりをそえている。

この手法は立本寺本でも同様で、文字塔の表現にいか細心の注意がはらわれていたか知ることができよう。

以上妙法寺本にみる特色を総合すると、十三世紀中頃の製作と推定される立本寺本よりは古様で、しかも藤原的造形感覚が顕著に認められる点が指適されよう。また、経文の書体もおだやかな藤原写経の体を伝えており、その製作は十二、三世紀の交と一応推定しておく。それはあたかも談山神社本の製作年代に重なる時期で、この藤末鎌初の時期に、趣きを異にする二種の法華経金字宝塔曼陀羅が相い前後して製作されたことは法華経絵画史においてきわめて意義深いといえよう。そして、立本寺本は、談山神社本と妙法寺本の両方の影響を受けて製作されたことが推察されるのである。

注1 表装裏に左の墨書が貼付けてある。

紺紙金泥法華経第七卷十重之塔聖德太子御筆

寛永十八巳年九月吉日洛陽具足山立本寺日遙

堺妙法寺之内報恩院什物之内

報恩院日先 日遙 日東 伝来候者也

図版要項

- 一 原田直次郎筆 騎龍観音 (原色刷) 明治二十三年 東京 護国寺蔵
油彩画布 二七三×一八三 cm
- 二 同 部分 (原色刷)
- 三 法華経金字宝塔曼陀羅 神力品・妙音品部分 大阪 妙法寺蔵
一、二 中江彬、三輪英夫「原田直次郎の歴史画」参照
- 四 同 薬王品部分
- 五 同 囑累品・薬王品部分
- 六 同 薬王品部分
- 七 真言八祖行伏図 惠果 全図 (赤外線写真) 東京 某氏蔵
三十一 紺地金泥、一幅全図の法量 一〇三・七×五四・五 cm
宮 次男「妙法寺蔵法華経金字塔曼陀羅について」参照
- 八 同 宮殿・楼門 (同)
- 九 同 同 宮殿内・代宗と惠果 (同)
- 十 同 同 同 右下・山景 (同)

七―十 柳沢孝「真言八祖行伏図と麁寺永久寺真言堂障子絵(五)」参照